

学位論文審査結果の要旨

氏名	渡部 潤一
審査委員	主査 杉山 隆 副査 檜垣 高史 副査 熊木 天児 副査 池田俊太郎 副査 重松 久之

論文名

3歳時における母乳摂取と喘息の関連-九州・沖縄小児健康調査-

審査結果の要旨

目的

母乳摂取は、種々な疾患のリスク減少と関連している。2014年に公表の113編の論文を解析したメタアナリシスで、母乳摂取機関と小児喘息との間には負の相関があることが示されている。特に2歳までのリスク減少が顕著であるが、7歳以上であってもリスク減少は有意であった。2015年に報告された29編の論文に基づく別のメタ解析では、長期の母乳摂取は、5-18歳小児の喘息のリスクを有意に減少させた。しかし、これらのメタ解析に含まれる疫学研究の多くは、西洋諸国で実施されたものであり、本邦においては、母乳摂取と喘息の関連に関する疫学研究は少なく、また、その結果も一致していない。今回、3歳児を対象とした横断研究のデータを活用して、母乳摂取期間と喘息および喘息有症率との関連について解析した。

方法

平成24年5月～平成26年3月の間に、九州、沖縄45市町において、3歳児健康診査を受診した小児を対象に横断研究を実施した。68,527名の受診者のうち、62,449名

の保護者に、質問調査票を配布し、6,576名より回答を得た。International Study of Asthma and Allergies in Childhoodの基準に則り、過去1年の喘鳴を定義した。過去に医師から喘息診断を受けたことがある場合、喘息ありと定義した。母乳のみを摂取していた期間を「専ら母乳」、部分母乳を含め、母乳を摂取していた期間を「母乳摂取期間」と定義した。摂取期間の分布に基づいて専ら母乳期間は2分位、母乳摂取期間は4分位して解析を行った。本研究に使用する変数に欠損データのない幼児6,412名を解析対象とした。多変量ロジスティック回帰分析を用いて解析を行った。

結果

喘鳴及び喘息の有症率は、それぞれ19.5%と7.0%であった。専ら母乳期間4ヵ月未満に比較し、4ヵ月以上と喘鳴及び喘息有症率との間には、いずれも有意な関連を認めなかった。一方、母乳摂取期間では、最も摂取期間の短い群（10ヵ月未満）に比較して、10ヵ月以上14ヵ月未満、14ヵ月以上19ヵ月未満、19ヵ月以上のいずれの群においても、喘息有症率と有意な負の相関を認めた。調整済みオッズ比（95%信頼区間）は、それぞれ0.69（0.52-0.91）、0.73（0.56-0.97）、および0.67（0.51-0.88）であった。母乳摂取期間と喘鳴との間には有意な関連を認めなかった。

結論

今回の結果は、母乳摂取期間と喘息との間に負の関連を示した過去の欧米の研究を中心としたメタアナリシスの結果と一致している。本邦においても、母乳摂取は喘息に予防的であるのかもしれない。しかしながら、本研究は黄横断研究であり、因果関係を述べることはできない。今後、母乳摂取と喘鳴及び喘息との関連について、日本人における多くのエビデンスを蓄積していくことが必要である。

本論文の公開審査会は平成30年1月15日に開催された。申請者は研究内容を英語で明確に口頭発表した。その後、審査委員より、本研究と先行研究の対象者の相違、本研究の対象者と一般ポピュレーションの相違、母乳摂取に関する評価法などの方法論、本研究と他の日本発の先行研究との結果の相違に関する考察、母乳の長期間摂取と喘息の負の関連についてのメカニズムや今後の研究の方向性などに関して多くの質疑がなされた。申請者はそれらの質問に対する確に応答した。また申請者の研究ノートには、本研究を遂行するためのシステマティックレビューの足跡が確認され、審査委員は申請者が本論文関連領域に対して学位授与に値する十分な見識と能力を有することを全員一致で確認し、本論文が博士（医学）の学位授与に値すると判定した。